

## 圖 版 解 說

## 二 小野雪見御幸繪詞

東京美術學校藏

紙本青色 卷子裝一卷

天地二九・一横(九寸六分)  
全長八五四・八横(二八尺二寸一分)

(梅津次郎「小野雪見御幸繪詞」参照)

## 三四 趙璚筆十六羅漢像

千葉 法華經寺藏

絹本青色 八曲屏一雙 各扇畫面竪八七・七横(二尺六寸三分)  
横四四横(一尺四寸五分)

前號に載せた拙稿「款記ある宋元佛畫」中の一點である款記は前號圖。既述の如く第一、第二、第五、第十尊者は全くの後補であり、餘もまた剝落著しく、極めて廣く補筆の手が加はつてゐるが、なほ數圖のよく原始の態を保てるがあり、之に趙璚の款記を存する唯一の畫迹なることを併せ見れば、また貴重すべき一資料たるを失はない。

款記は弘賢の輪翁畫譚に云ふ至極の小楷であつてこの點は畫院の風に甚だ近い。唯斷爛著しくして今殆んど讀み難いが、前號に掲げたそれを弘賢の説を參照しつゝ判讀すれば略「四明□塘趙璚筆」とあるものゝ如くである。□字は弘賢に依れば「城」であつた。但しこの城塘の名に就いて見るに、由來四明の地誌は甚だ浩漭にして素より淺學なる私の未だ凡ては經目し得ず、僅かに宋元間の數書を倉卒の間に通觀したが、この程度にては發見しない。この點は他日の精査を期するが、別に假に之を府城の塘路を示せるものとしてもやや訝しく、或は弘賢の誤讀に非るかも一應疑ふべきかも知れぬ。かく見ればその字形よりして例へば「鹹塘」の如きを擬し得るであらう。鹹塘街は拙稿に引いた

開慶四明志中の慶元府内樓店務地のうち第一等地の下に見る名である。

この圖は嚮に一言せる如く此種の寧波佛畫中に在つてやゝ異色がある。即ち賦彩は他の強烈なるに似ずして甚だ穩雅であり、描線また細軟、文様に於て殊に著しく、添景姿態の構圖も簡にして岩座と座布との外は背景に一樣の單色を施すのみで、相國寺畫の如き穠褥或は誇張を見ない。座布に點描法を用ふる裝飾的技法はこの種中の範とするに足るが、極めて細き線を用ひた麻の葉、褥等の直線文は一群中に類例が尠く、寧ろ通例元畫の様式とせられる所謂張思恭風の佛畫のそれに通ずる。東海庵畫を最とする配景を減じた羅漢畫の構圖も恐らく元代に於ける一傾向であらうか。唯就中寫貌、描文の綿密を極め、賦彩また變化に富み、未だ元畫の纖弱と單調とを感じしめない點によく宋代佛畫の特色を保つてゐる。而も甚しく刺戟的な卑俗味は示さずとは云へ、なほ以て斯果の妙境を窺はんよりは寧ろ畫法の裝飾味に特色を求むべく、餘の寧波畫と同じく當代工人の手に成つて唯やゝ興味あるものとすべきは論を俟たない。

本圖の補筆に就いて一言すれば、全補四圖中第一尊者に法印榮信、第二尊者に法眼養信の款がある。養信の法眼に敍せられたるは文政二年十二月、榮信の歿せるは同十一年七月であるから、この二圖は略、この間に成つたものであらう。而して現裝八曲屏の裏面にはこの二人の外、助信及び信義の描ける梅竹の略畫を貼合せて居り、助信に十童と冠記せるがある。友川助信の十歳に當りしは文政二年らしく、依つて思ふに恐らくこの年に本圖の修補を行ひ、同時に棧槽を改めて屏背に寄合書を試みたのであらうか。而してこの年は弘賢の所見を記せる文化二年より十四年後に當る。なほこの四人中の信義が古畫備考の著者朝岡興禎なるは更めて云ふまでもない。(渡邊)

藏寺經華法 葉千

像漢羅六十